

## 医療界と患者をつなぐ 「翻訳者」として情報発信

兵庫県尼崎市に1995年、外来と在宅診療を担う診療所を開業して以来、24時間365日、年中無休で地域の患者さんと向き合ってきた。いつも心がけているのは、なるべく専門用語を避けて誰にでもわかるような言葉を使うこと。医療界と患者さんや地域住民との間をつなぐ「翻訳者」として日々の診療にあたっています。

診療に携わりつつ、医療に関するさまざまな情報発信を行うことをライフワークとしています。その一つが、朝日新聞デジタルの医療情報サイト「アピタル」内でのブログです。2010年4月から掲載を開始し、昨年7月までの内容をまとめた『町医者だから言いたい!』（ロハスメディア）シリーズが3月11日に刊行されました。くしくも東日本大震災からちょうど1年であり、本には現地で見てきた震災後の医療状況などについても書かれています。それを意図して出版したわけではありません（笑）。

ブログは始めてから1日も休まず、毎朝15分ほど書いています。



# 長尾和宏

医療法人社団裕和会 長尾クリニック院長

## 在宅医の視点からブログで 医療情報をわかりやすく発信 良質な医療提供を行い 地域包括ケア構築に奮闘

開業医として日々の外来・在宅診療に追われる傍ら自らを医療界と患者・地域住民とをつなぐ「翻訳者」と称し、精力的に医療情報の発信を行っている。医療法人社団裕和会長尾クリニックの長尾和宏院長。その一環として今年3月、著書を3冊同時に出版した。

在宅医の視点から終末期医療に対する提言も数多く行っている同氏に医師としての情報発信や今後の地域医療のあり方などについて聞いた。

取材・文：東原昭彦 撮影：中野たま

テーマは自由なので気の向くままに書いているところもありますが、片足は医療界に、もう一方の足は患者さん側に置くスタンスを心がけています。「医師への謝礼の相場は?」といった、医療に関する素朴な疑問から尊厳死などの幅広い話題をなるべく「中学生でもわかるような」文章でつづっています。医師からすると一見くだらないことに思えても、患者さんにとっては大切な情報だということがあるからです。

日々診療にあたるなかで、「病院と診療所の「文化」の差は大きい」と感じています。現代の医療が複雑・高度化している面はあるにせよ、診療現場や診療所経営で感じたことを率直に医療関係者に話してもなかなか噛み合わず、もどかしさを感じる人が多い。特に、相手が病院関係者だと顕著です。専門用語を多用する医療関係者が多く、「患者さんは到底理解できないだろうなあ」「本当に患者さんのための医療になっているのか」と感じることも頻繁にあります。

著書では在宅医として、患者さんにより近いところにいる町医者だからこそ書ける本音をわかりやすく書いています。患者さんだけでなく、

